保護費削減 厳しさ一層

満足する食事3割しかできず■被服購入も控え…

生活保護受給者 180人聞き取り

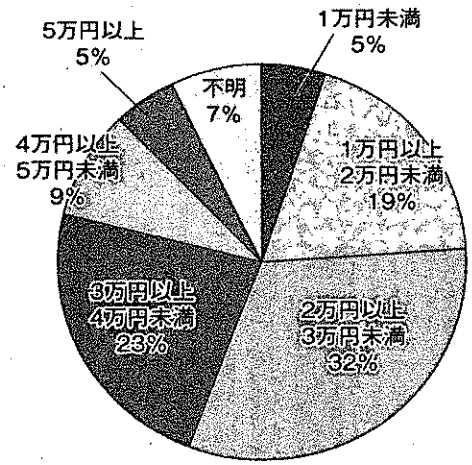
長野県民医連

「生活保護なしでは生きていけなかった」「あたり前の暮らしもできない」―。長野県民主医療機関連合会が実施した生活保護受給者の生活実態調査に、「いのちの叫び」ともいうべき声が多数寄せられました。

長野県民医連が17日、県庁で記者会見し、調査結果を発表しました。調査は2016年1月～4月末、加盟医療機関に受診した生活保護受給者180人への聞き取りです。13年、14年につづき3回目。

岩須靖弘事務局長は、「2年前より、生活の厳しさ、深刻さが増している」と指摘。根本には社会保障制度が拡充ではなく、正反対の方向に改変されているからだと強調しました。

生活保護制度は改悪が続き、11年に老齢加算の廃止、13年から生活保護基準の段階的引き下げ、15年に住宅扶助、冬季加算引き下げが実施されました。



1カ月の食費（世帯分）

電気代を節約

調査結果から、食事など生活費を極度に切り詰め、被服購入も理美容も控える厳しい生活実態が明らかになりました。

「毎日、炊きたてのご飯が食べたいが、電気代の節約のため、毎日は炊けない」「スーパーで他の人が使わないキャベツの外側の葉をもらってくる」―。

食事の回数は1日3回がほぼ半数。1カ月の食費は半数以上が3万円未満。「満足する食事が出来ているか」に「はい」と答えた人は3割程度です。

会見で調査結果について述べた（前列左から）長野県民医連の鮎澤さん、岩須事務局長、長野大学鈴木氏ら＝17日、長野県庁

「生存権取り戻したい」

「昨日の食事を教えてください」の設問に、朝昼晩とも「シーチキンにマヨネーズをかけて食べた」と答えた慢性腎不全の女性。3回とも「ごはん、ふりかけ」と回答した高血圧の女性もいました。

「肩身狭い」と

「家賃4万、光熱費3万、食費2～3万、薬代7～8千円を使ったら手元に残らない」「保護費が下がる一方。今の生活で精いっぱいだから、また下がったら厳しい」―。

この1年、被服購入や理美容に1度もお金を使えなかった人が約3割もいます。冠婚葬祭なども、「香典もできない」「ご祝儀など払う余裕がない」などの回答がありました。

生活保護を受給してよかった事は「医者にかかれる」が圧倒的で、「死なずに済んだ」「生きていける」など、それまでの過酷な生活状況が反映しています。一方で、周りの視線を気にし、「肩身が狭い」「みじめ」と感じています。

調査に関わった上伊那生協病院の鮎澤（あいざわ）ゆかりさんは「生活保護を利用していても、健康で文化的な生活保障がされていない。生活保護行政の在り方が反映しており、マスコミと一体になった、生活保護への嫌悪感、罪悪感を抱かせる政策それ自体が人権侵害ではないか」と指摘しました。

「誰にも起きうる病気になっただけで、職を失い、医療費が払えず生活が困窮すること自体、社会保障が機能していないことであり、背景には年金や働き方の問題がある」と述べ、「ともに生存権を手にするため、たたかい続ける」と表明しました。

長野大学の鈴木忠義准教授は「受給者のリアルな生活実態を知るうえで貴重なデータだ」と述べました。介護現場で働く職員も会見し、介護保険改悪で利用料が重い負担となっている状況や、介護者の処遇改善などについて報告しました。

1/22
長野